

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

どうげん
道元禅師

平成28年9月第4週放送

今月二十九日は、道元禅師のご命日にあたります。大本山永平寺では、この時期に御征忌という法要が執り行われ、内外の僧侶が一堂に集う大法要となります。

道元禅師は、建長五年、西暦一二五三年に五十四歳で亡くなりました。

その生涯を閉じるにあたって道元禅師は、ご自身の境界を簡潔な漢詩である「遺偈」に託されます。

五十四年、第一天を照らす
箇の躡跳を打して、大千を触破す

つまり、「五十四年間、仏道の第一線を歩んで来た。この世界を飛び出して、これからも仏道を歩み続けて行くのである。」と遺されています。道元禅師の境地を示すものです。

また、この道元禅師の遺偈は、その構成から、師匠である如浄禅師の遺偈を受けて、その教えを嗣ぐ意思を表すものであるともいわれています。

遺偈とはこのように、禅僧がその修行を通して体得した教えを現すものであり、現代においても禅僧は、いつ、自身の身に何が起こっても後に残る弟子たちが困らないように、年の初めの来るたびに遺偈を遺しておくことが習わしとなっています。

一方、現代で遺言というと、自分の持っている財産を次の世代の人に如何に分配するかということが中心となります。それが無いと余計な争いになるからと準備したはずの遺言も、その中身によっては、次の世代の人たちの間で争いが起こることも少なくありません。

禅僧の遺偈も、私たちの遺言も、次の世代の人たちが困らないようにという意味で遺されるという点では同じものです。

しかしながら、遺偈と遺言には、何を遺すかという違いがあるように思います、遺言をうけても、もの・財産に執着があると、自分のものであると考え、遺される側にはそれを奪い合う争いが生じることにもなります。

一方、遺偈のように、もの・財産への執着を離れることができれば、遺される側には、故人の生き方が残るでしょう。それは、奪い合うものではなく、慕い、分かち合うものであり、争いも起こらないということにつながるのではないのでしょうか。

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

どうげん
道元禅師のご命日にあたり、自分自身の生き方を^{のこ}遺す、その遺し方を考えてみる
ことも、私たちにとって必要なことなのかもしれません。

— 終 —